

※令和7年度より四半期毎の掲載となります。  
次回掲載は10月号を予定しています。

## 気候と共に歩むラオスの1年

国立健康危機管理研究機構

国際医療協力局 市村 康典

(国立国際医療研究センターは令和7年4月1日から国立健康危機管理研究機構に組織改正)

この海外だよりでは、ラオスのことがしばしば取り上げられています。私は、ラオスで2022年3月から2025年3月に行われた、JICA技術協力プロジェクト「病院の保健医療サービスの質および財務管理改善プロジェクト」に長期専門家として派遣され、ラオスで約3年過ごしてきました。この記事では、ラオスで過ごした1年間の四季の移り変わりと、現地で感じた文化・気候・衛生環境についてお伝えします。

ラオスは東南アジア唯一の内陸国で、インドシナ半島のほぼ中央に位置します。熱帯モンスーン気候に属し、面積は日本の本州とほぼ同じ約24万平方キロメートルであり、約700万人の人口が暮らしています。

毎年4月中旬になるとラオス正月「ピーマイラオ」が訪れます。この頃は1年のうちで最も暑さが厳しく、日中の気温は40℃近くに達します。暦の上では3日間ですが、実際にはその前後にも町中で祝賀行事が続き、水かけ祭りとしても知られます。お寺に参拝して仏像を洗い清め、前年の悪い気を落として新年の幸運を呼び込みます。仏像だけでなく、知り合いはもちろん見知らぬ人同士でも水をかけ合い、親せきや友人で集まって揃いのシャツを着たり、大音量の音楽やカラオケとともに食事やお酒で宴会を楽しんだりする様子で、街全体がお祭りに染まります。ピーマイラオの前は、厳しい暑さと祭りへの期待感でみながそわそわしていますが、ピーマイラオが終わると、仕事モードに切り替わっていきます。

5月から10月にかけて雨季がはじまります。序盤

は数日に1回程度の雨ですが、6月以降はほぼ毎日夕方から夜にかけて激しいスコールが訪れます。とはいえ一日中降り続くことは稀で、晴れ間の残る日中には35℃前後の暑さが続き、枯れた大地が再び緑を取り戻す様子が印象的です。ラオスでは天気予報よりも現地の感覚の方が当てになることが多く、遠くで雷鳴が聞こえ、空が急に暗くなって風が吹き始めると、住民は家路を急ぎ、屋外の荷物を片付け、落雷に備えて事前にブレーカーを落とす人もいます。道路にはあつという間に大きな水たまりができ、車両が通行できなくなることもあります。ラオスではネット整備が進んできていますが、スコールや落雷の影響で通信が途切れやすく、雨季にはオンライン会議や電話での打ち合わせがスムーズに行えないことがあります。

雨季の半ばを過ぎると落橋や山間部での土砂崩れが発生しやすく、船を使わなければ移動できない区間が現れるため、移動計画には余裕あるスケジュールと最新情報の収集が不可欠です。また、就業人口の約70%が農業に携わるラオスでは、繁忙期である雨季の期間、住民向けの活動を企画しても参加者が限られることもあるため、現地の状況に合わせた計画作りが求められます。

10月に入り田が色づき秋めいてくると、朝晩に少しずつ涼しさが感じられ、雨の間隔も長くなります。毎年10月上旬には、僧侶が約3か月間の寺院修行を終える仏教行事「オークパンサー（出安居）」が祝日となります。多くの県では、この時期に川辺でボートレース祭りが行われ、村ごとに編成されたチームが櫂を漕いで競い合い、土手から大勢の人が

声援を送ります。ボート祭りの会場近くには屋台も立ち並び、普段はひなびた場所も賑わいを見せます。

オークパンサー前後にまとまって雨がひとしきり降ると、乾季がはじまります。ラオスでは雨季と乾季がはっきりと分かれており、乾季には数か月に1度も雨が降らないことがあります。気温は日中30℃前後、朝晩は20℃を下回り、乾季のはじめには爽やかな風が吹きます。ただし、予算年度の切り替えが12月と1月であるため、12月近くになると省庁や国際機関の会議が相次ぎ、以前に入れた行政や病院の関係者との予定が直前で変更になることもしばしばです。

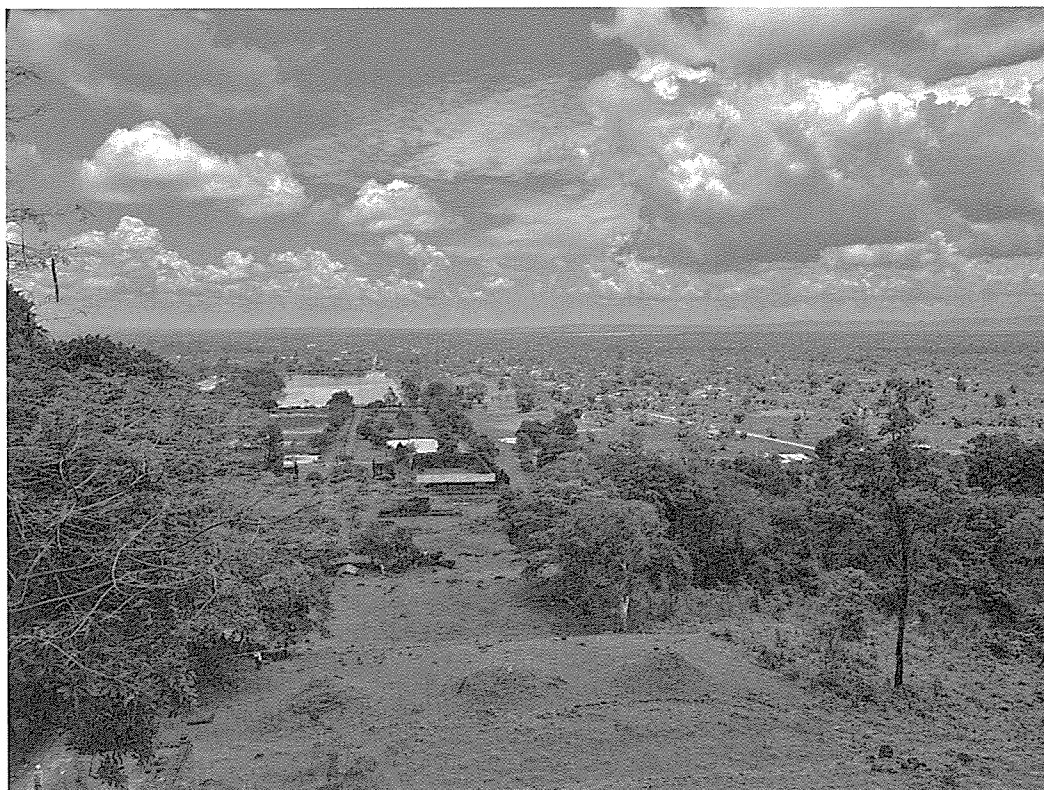
1月は乾季の中でも最も寒さを感じる時期で、日中の気温は20℃前半にとどまります。暑さに慣れた現地の人々はダウンを着込んで寒さをしのぎます。また、涼しさとともに、雨が降らずに乾季のほこりが舞う中で風邪をひく人や呼吸器の不調を訴える人も増え、体調管理には注意が必要です。

2月上旬以降は、乾季の中でも「暑期」と呼ばれる時期に入り、雨が降らない中で日中・夜間ともに気温が上昇し、3月下旬には35℃～40℃に達しま

す。人々は再びラオピーマイ（ピーマイラオ）が来るのを心待ちにしながら暑さを乗り越えます。

このように1年を通じた気候の変化は、自然豊かなラオスの暮らしに大きな影響を及ぼしますが、それと同時に人々は自然の声に耳を傾け、知恵と助け合いでしなやかに対応しています。スコールの気配が漂うと互いに声を掛け合い、移動を控えて軒先や屋根の下でやり過ごします。橋が流されるとすぐに簡易な架け橋が設けられ、土砂崩れで道が遮られると別ルートを探して車やバイクでの移動を確保します。乾季の強い日差しには早朝や夕暮れの涼しい時間帯に作業を移し、日中は木陰で休息を取るなど、四季折々のリズムを身につけています。

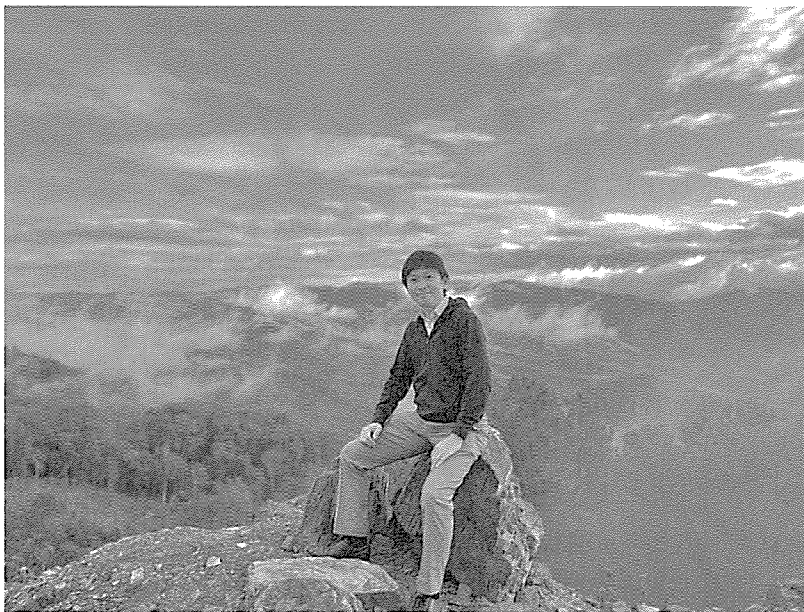
一方で、いくつかの感染症は特定の時期に患者数が増え、その要因に気候が関与していることが知られています。蚊を媒介して伝播する蚊媒介感染症の1つであるデング熱は6～9月に患者数のピークがあると報告されており、これにはこの時期に増える降雨量、湿度、気温との関連が考えられています<sup>1)</sup>。同様に、類鼻疽菌の感染で引き起こされる類鼻疽は雨季の5～10月に症例数のピークを迎えることが報告され、地下水位の上昇、表土中の細菌量の



世界遺産ワットプーから望む、緑豊かな水田（チャンパサック県チャンパサック郡）



迫り来るスクールを予感させる雲（チャンパサック県バクセー市）



南部ラオスの山間を望む風景とともに（セコン県ダクチュン郡）

増加による細菌への曝露が影響するとされています<sup>2)</sup>。メコン川の下流に分布しているメコン住血吸虫は、淡水巻貝から水中に放出されて汚染された水に接触した人に皮膚から侵入しますが、ヒトにおける住血吸虫症感染の多くは成熟した巻貝が観察され、川の水位が下がっている乾季（10月～4月）に発生すると言われています<sup>3)</sup>。乾季の終わり（3月が最多）に患者数が増える腸チフスは、気温の上昇と、乾季の終盤で水源が限られることが示唆されています<sup>4)</sup>。ラオスにおいても、季節や気候の変化に応じた感染症対策の準備と対応が求められます。

2025年は、日本とラオスが1955年に外交関係を結んでから70周年にあたる節目の年です。この間、ラオスの保健分野をはじめさまざまな分野で、日本政府や民間団体、JICAなどを通じた官民による支援が幅広く行われてきました。この記事をご覧の皆さまの中には、これからラオスを訪れる方もいらっしゃるかもしれません。ラオスに限らず、他の国や地域で活動される際にも、現地の年間行事や気候パターンを事前に把握しておくことは、計画を検討するうえでの参考となります。

## 参考文献

- 1) Soukavong M, Thinkhamrop K, Pratumchart K, et al. "Bayesian spatio-temporal analysis of dengue transmission in Lao PDR." *Sci Rep*. 2024 Sep 12 ; 14(1) : 21327. doi: 10.1038/s41598-024-71807-3.
- 2) Bulterys PL, Bulterys MA, Phommasone K, et al. "Climatic drivers of melioidosis in Laos and Cambodia: a 16-year case series analysis." *Lancet Planet Health*. 2018 Aug ; 2(8) : e334–e343. doi: 10.1016/S2542-5196(18)30172-4.
- 3) Matsumoto-Takahashi ELA, Kumagai T, Oyoshi K, et al. "Impact of precipitation on the prevalence of schistosomiasis mekongi in Lao PDR: Structural equation modelling using Earth observation satellite data." *One Health*. 2023 May 11 ; 16 : 100563. doi: 10.1016/j.onehlt.2023.100563.
- 4) Roberts T, Rattanavong S, Phommasone K, et al. Typhoid in Laos: An 18-Year Perspective. *Am J Trop Med Hyg*. 2020 Apr ; 102(4) : 749. doi: 10.4269/ajtmh.19-0637.

